

---

# ドラキュラが笑ってる

太田 裕介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラキュラが笑ってる

### 【Nコード】

N6127D

### 【作者名】

太田 裕介

### 【あらすじ】

自殺を考えた女子高生の前に、少年のような自称ドラキュラが現れて・・・なお話です。ご意見ご感想大歓迎です！

## ドラキュラが笑ってる・1

目の前には、ナイフ。

刃先は鋭く尖って、月明かりに反射した光が、やけに神々しい。

深夜3時。暗い部屋。あたしは、何度となく見たそれを、手首に押し当てて、思いとどまった。

あたしの手首には、無数の傷跡。

もう、何度、こんなことをしてきたのか、自分でもわからないくらい、おびただしい傷跡。

これを見ると、本当に、こんなこと、やってもしょうがない、って気分にはなる。

でも、止まらない。あたしの衝動が、止まらない。

もう嫌、だった。

生きてるのが嫌。いろいろ悩むのが嫌。学校に行くのが嫌。建前ばっかり言う親が嫌。先生が嫌。アイツラが嫌。

何もかもが、嫌なの。

「おい、どうせなら、その血、俺にくれ」

唐突すぎの、少年の声。

えっ、っと思つて窓を見た。

ガラガラガラ。ベランダの窓を開いて、その少年は、あたしの部屋に入ってきた。

「な・・・え・・・?」

事態が理解できない。

「っていつか、どうせ死ぬなら、俺に首、噛ませてくれない?」

その少年は、あどけなさが残っているけど、あたしと同年くらい

に見えた。

叫びたいという思いを、ぎりぎりで食い止めた。

こんな夜中に大声をあげたら、また親がずかずかとあたしの部屋に入ってくる。

そして、また死にたくなるくらいの「説得」が始まる。

それくらいなら、これくらいの驚きくらい、どうってことはないように、瞬間的に思えたのだ。

「あ・・・あなた、誰？」

あたしは、恐怖心とか、そういうのをぐっところえて、尋ねた。それでも、やっぱり、身構えはする。

「何だよ・・・今から死のうとしてたくせに、俺が怖いワケ？」

少年は余裕たつぷりに、あたしの前にあぐらをかいて座った。

「こ、怖くなんか、ないわよ。でも、いきなり部屋に窓から入ってこられたら、びっくりぐらいするわ」

「ああ・・・まあ、そうか。俺、マサキ。おねーさんは？」

マサキと名乗るその少年。見たところは、別に変なところはない。

けど、さっきの首をかませてくれっていうのは、何なのよ？

「・・・フミカ」

簡単に、名前だけ、言ってみた。

「ふうん、で、フミカ、今から死ぬんだろ？でも、どうせなら、俺に首、噛ませてよ。ラクに逝けるよ」

またも、同じことを言う。しかも、楽に死ぬって、どういうこと？

「な、なんで、あなたに首をかまれたらラクに死ぬのよ？」

マサキは、その質問を聞くと、嬉しそうに笑った。

「だって、俺、ドラキュラだもん。俺に血吸われたら、フミカもドラキュラになれるから、人間的には死ぬことになるよ」

あっさりと、マサキは、ファンタジックなことを言っただけだ。

さすがに、ちよつと引いた。

マサキの言うことは、非現実すぎて、あたしは笑ってしまった。

「あんだねえ、冗談はいいから、さっさと出てっしてくれない？不法侵入で訴えるよ？」

ちよつと、おねーさんと言われたことで、威張ってみた。

「お？フミカ、今から死ぬくせに訴えるの？」

しかし、マサキはニヤニヤ笑う。まるで意に介さない。

「そんなのどうだっていいじゃん。早く、早く、俺に嘔ませてよ」  
そう言っつて無造作に近づいてくるものだから、あたしは手に持っつていたナイフをかざした。

「ちよ、ちよつと！それ以上近づかないで！」

「あれ？何だよ、死ぬのが嫌になつた？」

全くナイフを怖がることなく、余裕の笑みを浮かべたままだ。

そんな余裕ツラが、うつとうしくなつてくる。

「そ、そーよ。やっぱり今日は死ぬのやめたの！だから、さっさと出て行つて！」

「何だよ・・・そんな怖がるなつて」

マサキはちよつとマジメな表情になつた。

いきなり態度が変わつて、少しドキツツとなる。

意外と、コイツ、美少年だ。

ちよつと、うつとり、なんて程でもないけど、ポカンとしたのが、ミスだつた。

マサキはあたしの持っつていたナイフの刃を、右手で握つた。

「な・・・！」

あたしはビクツツとなつてしまつて、思わずナイフを引つ込めようとした。

スパツ！

という音は実際に聞こえた訳じゃないけど、もし擬音化するとしたら、これしかないと思う。

マサキの右の手のひらから、赤い血が・・・滴り落ちた。

「あ・・・」

「これくらいでびびるな。こんなじゃ」

マサキは手のひらをかざした。

あたしが傷つけたはずの手のひらは、ふわりと煙があがると。

あたしの目の前で、何事もなかったかのように、傷が消えてしまった。

「・・・な？こんなじゃあ、俺に傷なんてつかないって」

ニヤリ。とマサキは笑う。笑うと、小学生にも見えてしまうくらい、幼い少年だ。

なんとまあ、ファンタジー。まさに、ファンタジーの世界。

あたしは、目の前の現実が信じられずに、ただただ呆然と、マサキを見ていた。

「お？フミカ、やっと信じた？」

そんなあたしを見て、何故かこいつは、嬉しそうなのだ。

そんな生意気な態度が、妙にむかついてしまったので。

「う・・・うるさい！とにかく、今日はもう死なないんだから、あんたなんかには用はないの！」

「なんだよー。人がせつかく、楽に逝かせてやろうと思って来てやったのに」

なんて言っつて、ふくれる表情が、実にかわいいものだから、余計にむかつく。

だから、これだけは言いたくなかった。

「あんたは人じゃないでしょ！」

## ドラキュラが笑ってる・2

マサキが窓からやってきた翌日。あたしは、当然のごとく、学校を休んだ。

もはや、親もそれを咎めない。

腫れ物に触るような態度がうっとうしくなって、結局あたしは部屋に籠る。

本当に出会うつもりはまったくないけど、とりあえずネットでチャットして、適当な男の人と喋って、「今から会おうよ」的発言が来たら、即逃げ。

そんなことをしている間に、今日も夜になった。

「よっ」

ここは玄関か？って言いたくなる。マサキは今日も窓から普通にやってきた。

普通のTシャツに、普通のジーンズ。

昨日の一件がなかったら、コイツがドラキュラだとは、やっぱり思えない。

「なんで今日も来るのよ」

あまり言いたくない台詞だった。

本当は、ちよっと、今日も来ないかなって期待してたからだ。

「いやあ、そんなに俺に来て欲しかったのか。さては俺の美貌に惚れたな」

そんなあたしの心が、コイツには透けて見えるのか？と、ちよっとびっくりする。

「はあ？あんたバツカじゃないの？」

見透かされるもんかと強がってみた。

「ふーん、あ、そう」

しかし、そう言って、子供っぽさが消えないマサキの笑顔が近づい

てくると。

「・・・ほら。今日はナイフ、俺に向けないじゃん」

マサキはあたしを、いきなり抱きかかえた。

不覚にも、驚きやら、ドキドキやら、色んな思考が頭の中ではじけて、真っ白になってしまふ。

「ふうん、フミカ、お前結構かわいいじゃん」

ぐいっと体を寄せられた。意外と、子供の姿のくせして、力がある。

「ちょ、ちょっと！あんた、離せつてば」

見た目が華奢な少年であることをいいことに、あたしは力いっぱい引き離そうとした。

なのに、いくら離そうとしても、離れない。

「まあまあ、大丈夫。全然痛くないから」

嬉しそうな声。

この声を聞いて、ヤバイ、と本能が叫んだ。

「いーかげんにしろっ！」

あたしは右手で思いつきり、マサキの頭を殴った。

「いって！」

力が緩んでくれたので、すかさずあたしはマサキを押し返した。

「・・・俺の美しい頭に傷がついたらどうするんだ？」

なんて言いながら、しゃがんで頭をさするマサキを見ると、とてもドラキュラには思えない。

「誰も今日死ぬなんて一言も言ってないし・・・」

あたしは、ずいっと前に出ると、マサキの前に仁王立ち。

「だいたい、あんたの頭なんて、美しくもなんともないでしょ！」

「ひどい・・・」

うなだれて、へこむマサキを見ると、なんとも言えぬ快感がよぎってしまった。

あたし、Sの資質あるんだろうか？

「まったく、今日は誰とも会わずにこの部屋にずっといてたってい

うのに、なんであんだここに来るワケ？」

とりあえず、あたしは落ち着きたくて、コーヒーを淹れた。ついでだから、マサキには紅茶を淹れてあげる。

あたしの部屋にはポットどころか、自炊するための炊飯釜まである。親と一緒にご飯も食べたくないし、親の作ったご飯も食べたくなかったからだ。

ちなみにおかずは適当にコンビニで買ってる。

「いやあ・・・今日こそ血、吸わせてくれるかなって思って・・・」  
マサキは紅茶をごくごく飲む。熱くないんだろうか？

「ふうん。あんた本当にドラキュラなんだったら、あたしでなくても、誰でもいいじゃない」

結構、当然の質問をしたつもりだ。

「うーん、俺、こっく見えても真祖の血筋だから、誰でもいいってワケじゃないんだよね」

「真祖？」

「うん、簡単に言うと、世界で最初のドラキュラの末裔ってワケ」  
「ふうん」

本当はすごいんじゃないだろうか？なんて思っていたけど、それを正直に驚いた表情を見せなくなかった。

「てゆうかさ、フミカ、今日一歩も外を出てないって・・・マジ？」  
あっという間に紅茶を飲み干すと、マサキはまたあたしに少し近づいてきた。

「そっだよ」

ちよつと身構えてしまったのが、マサキにはばれてなければいいけど。  
「なんで？」

マサキも、当然の質問をしたと思ってるんだろう。  
あたしもコイツの立場だったら、そう思うと思う。  
だけど、あたしは。

「なんだっていいじゃない！」  
急にイライラしてしまった。

脳裏に焼きついて離れないのだ。

いろんな、あたしを現実から逃避させようとする、うざったい事の  
数々が。

「・・・」

マサキは、何も言わず、黙ってしまった。

これも、当然の事だと思う。

「・・・ごめん」

あたしは、比較的冷静になれた。

何も言わずにあたしを見つめるマサキの風貌が、あまりにも純粹そ  
うな少年だから。

見た目って重要だな。って思ってしまったけど。

「なんかさ、フミカ、結構大変そうだけど・・・」

気まずい沈黙が続くんじやないかって思ったけど、意外とマサキは  
普通だった。

「とりあえず、人間ではできない事を、俺がサービスしてあげよう」  
普通だったけど。

その後続く言葉は、とんでもなくファンタジーな一言だった。

「空、飛んでみよつか。ストレス発散に」

「はあ？」

あたしが言葉につまって、疑問だけを表す声を出したところには、マ  
サキはあたしの背中に立っていた。

「いくぞー」

それだけ言うと、あたしを抱えて、マサキは・・・  
空中に浮いていた、のだ。

「えええええ」

あたしは声にならない声を、何とか出した。

さらに、窓が、自動扉のようにガラガラって開きだす。

・・・誰も手を触れてないのに！

「ほーい、レッツ・ゴー！」

あつという間に、マサキと、マサキに抱えられたあたしは・・・  
夜空に飛び立ってしまった。

### ドラキュラが笑ってる・3

もし夢の世界が現実になったら。

空を飛びたいと思う人間って、多いんじゃないだろうか。

自由に空を飛びまわって、風の吹くままに。

だから昔から、マンガや小説の主人公は、空を飛べる人間が後を絶たないんだと思う。

マサキに抱きかかえられて、あたしは夜空を飛んでいた。

空は決して満天の星空じゃない。ロマンチックな夜景を見たわけでもない。

だけど、自分が知っている街並みを、自分が見たことのない視野で見渡すと。

素直に感動してしまっていた。

「うし、ここらで休憩」

マサキと、マサキに抱きついていたあたしは、見たこともない丘陵に降り立った。

草葉と木々に囲まれて、見晴らしがとてもいい。

あたしが住んでいるところがそこかどうかも分からないけど。

街明かりが星の光と重なって、空と地面の境界線が分からないくらい、景色はきれいだった。

「・・・きれい」

あたしは、知らずと高揚感に包まれていた。

空を飛んで、こんなところに来てきた。

そんな非現実的な現実が、あたしをドキドキさせた。

「なかなかオツなもんだろ？夜空のフライトってやつも」

マサキは得意満面の表情。

「あんたさあ・・・」

あたしは、思っていた不思議を、正直に打ち明けた。

「あんただったら、無理やり血吸っちゃう事だつて出来るんじゃないの？」

「んー・・・」

マサキは、ちよつと考えてから、答えた。

「俺さ、本気で嫌がる女の血を吸いたくないんだよね。」

「さつき無理やり吸おうとしたじゃない」

本当は遊んでいただけで分かってたけど、あえてふくれっ面で、突っ込んでみる。

「あはは・・・ごめんごめん」

笑うと、本当にかわいいから、つい許したくなってしまふ。  
卑怯な外見だ。

「普通は嫌がるでしょ、そんなの」

「うん、だから、こうやってサービスしちゃうワケよ」

どこまでも、馬鹿正直に答えるマサキ。

「ばっか。そんなの聞いたら、絶対嫌になるじゃん」

「あはは、まあそうなんだけどな」

マサキは原っぱに寝転がった。

見た目は、どこまでも、ただの少年。

そんな彼だけど、手についた傷を一瞬で治し、空を自由に飛びまわり、離れた物を自由に操る事が出来る。

マサキが実際に血を吸っているのを見たわけではないけど、これだけのことをやってのけられては、さすがにドラキュラである、ということを信じてない訳にもいかない。

そして、マサキは、あたしの血を吸いたいと言う。

・・・なんで、あたしなんだろう。

「ねえ、さつき、自分は真祖だから、あたしの血じゃないとダメって言ってたよね？」

あたしもマサキの隣で寝転んだ。

空が、とてもきれいだな。

なんて全然関係ないことが、頭の中に浮かんでいたけど。

「ん・・・と、そんなこと言っただけ？」

「言っただよー。誰でもいい訳じゃないって」

「ああ・・・それね。それは・・・たまたまかな」

「たまたま、なの？」

あたしはちよつとガツカリしてしまった。

「まあまあ。なんか質問ばっかだけど、じゃあ俺にも質問させるよ」  
マサキは体を起こすと、珍しく真面目な表情。

この顔が、笑った時の幼い感じとギャップが激しくて、急に大人びた麗しの美少年になる。

いつもこんな顔されたら、あたしも血を差し出すかもしれんな。

なんて、ちよつと考えていると。

「なんで、死にたいって思ってたの？」

一番、聞かれたくないところを、突かれてしまった。

親や先生に聞かれても、うざくて無言を貫くことしか出来なかった、この言葉。

きつと、部屋で聞かれただけだったら、マサキ相手でも、同じことだったと思う。

でも、深夜に部屋を飛び立ち、鳥のように空を駆けて、ロマンチックなデート気分を味わってしまったから。

あたしは、言葉を選びつつも、口を開いた。

「あたし、いじめられてるんだよ」

「誰に？」

マサキを覗くと、チャラチャラしてる様子はまるでなかった。

「クラスの奴」

真面目な表情のマサキを見るのは恥ずかしくなって、目線を外した。

「何で？」

「・・・わかんない」

嘘だ。本当は分かっている。

なんであたしがこんな目にあってるのか、なんて、言ったところで、何も変わらない。

言ったところで、誰も信じない。実際、誰も信じなかった。

マサキは多分信じてくれる。そうも思っけれど。

「・・・そっか」

マサキは、それ以上、何も聞かなかった。

## ドラキュラが笑ってる・4

あたしがミツナリくんに誘われたのは、ある日の午後。学校の帰り道だった。

学校では有名な男前で、ちょっと不良そうな風貌が人気だった。

なんであたしに声をかけたのか、あたし自身にも分からなかった。

「松本って、いつもまっすぐ家に帰るから、誘いたかったんだけど、誘いづらくて」

ミツナリくんがそう言うにつこり笑う顔があまりにカッコ良すぎて、あたしが好きになってしまうのに、そう時間はかからなかった。

ところが、問題は、ミツナリくんが学校でもかなり人気の男の子だったことだった。

ヤンキーっぽい女の子達がいつも話題にしていた。

そして、一応、彼女らしい人もいるらしいってこと。

つまり、ミツナリくんは、遊びであたしみたいな真面目っぽい子に手を出そうとしたただけだったってことだ。

あたしは、でも、ミツナリくんの言葉と顔で、すっかり騙されてしまっていた。

誰もいない教室で、あたしはミツナリくんを抱きしめられた。

「フミカ、悪い噂は色々聞いているかもしれないけど、俺、お前のことは本気なんだ・・・」

あたしはもうドキドキしながら、その言葉を信じきってしまった。た。

ミツナリくんの顔があたしに近づき、唇を重ねる。

初めてのキス。

頭がクラクラして、胸がドキドキして、もう訳が分からない状態でミツナリくんの手が、あたしの身体に触れて、そして、制服の中に

手が入って。

あたしは全く異性と経験がなかったもので、いっぱいいっぱいでも、別にいいやって気分になってしまっていた。なんか体が熱くなってしまって、ぼーっとしてしまっていて。

制服を脱がされていくのも、さっぱり覚えていないくらい。でも、その瞬間までは、あたしは結局ミツナリくんのが好きだったんだと思う。

あの叫び声を聞くまでは。

「ミツナリっ！」

はっとして、我に返った。

声の主は、いかにも私はヤンキーですと言わんばかりの、自己主張の激しい風貌の女。

クラスの隅っこにいる地味なあたしとは正反対の、クラスの中心的人物。

アキコっていう名前と、顔は、あたしも知っていた。

気が付くと、脱いだブラウスが床に敷かかれていて、下着がはだけていることに気付いて、慌ててあたしは胸を隠した。

「あんた・・・！また・・・！」

ずかずかとその女があたし達に近づいてくると。

信じられない光景が、あたしを襲った。

「ち、違っただって！これは・・・」

慌てた様子で、ミツナリくんは、言い訳を始めたのだ。

「何が違っのよ！この浮気者！」

「違う、違っって・・・！これは・・・」

ミツナリくんはあたしを見やることもなく、立ち上がって、アキコをなだめるのかと思ったら。

「これは・・・コイツに騙されたんだよ！」

なんと、あたしはあっさりと裏切られてしまった。

呆然として、そして唾然としている間に、ミツナリくんは間髪いれ

ず言葉を続ける。

「コイツが俺を誘ってきたんだ。誘惑されちゃって・・・本当だよ！信じてくれ！俺はイヤだって言ったけど、いきなり服脱いで、キスされて・・・」  
なにをバカな。

あたしはそう言いたかったのに、とつさに声が出なかった。

そんなあたしを一瞥し、沈黙のあたしが肯定していると思ったのか。

「テメー、人の男に手を出すなんて・・・」

その目は、もはや、確信に満ちていた。

違う。

あたしはそんなことしていない。

手を出してきたのは、ミツナリの方なのに！

あたしはアキコにぶん殴られ、何回も蹴られた。

あたしは、ただ何も言えずに、ブラウスを手に取ると、逃げるようにその場を立ち去った。

次の日。状況は、あたしの予想通りの展開になっていた。

クラスを中心人物であるアキコは、あつという間にあたしの悪評をクラス全員に言いふらしていた。

朝、学校に着いて、教室に入るとき、すでに雰囲気はいつもとあまりに違いすぎていた。

「フミカ、お前、なにミツナリくんに出してるのよ！」

いきなりアキコがたてついてきた。

周りには、アキコの取り巻きがズラリと揃う。

アホそうな顔のアキコが、熱くなって怒る様は、さらにアホそうに見えるな。

最初は、そう思っていたられるほど、意外とあたしは冷静だった。いや、冷静なつもりでいた。

「ミツナリくん言ってたじゃない、あんたから誘われて、断れなか

「たつて！」

「サイテー！あんた、人としてやっていい事と悪い事が分からないのかね？」

アキコの取り巻きが、すかさず次々とやってくる。

10人くらいに囲まれて、罵声を浴びまくる。

当のミツナリくんは・・・。

まだ、あたしは、一縷の望みを捨てていなかったのだ。

もしかしたら、ミツナリくんは、とりあえずあの場ではあんなことを言っただけなのかもしれないという、今となってはありえないとは思えない望み。

いきり立つ女どもを無視して、あたしは教室の中を目で追っていた。

簡単に見つかったミツナリくんはというと。

その様子を、他の男子と一緒に、ニヤニヤ笑っているのが見えた。

「女ってコエーよな」

そう聞こえたような気がした。

完全に裏切られた。とあたしが自覚した瞬間。

あたしは、ボロボロに泣いてしまった。

強く言い返すつもりで、学校に来ていた。

・・・悪いのは、ミツナリの方だったの！あんたらもアイツにとつてはアソビに過ぎないんだっての！

・・・あたしもあんたも、アイツに騙されてんだよ！

絶対に負けないと、強く思いながら、我慢して、やっとここまで来たというのに。

あたしは、結局、何も言い返すことが出来ず、ただ泣き崩れてしまった。

「泣けばいいってもんじゃないっての！」

「お前、一生そうやってる！」

あたしは、そんな罵声から逃げるように、走って教室を出て行っていった。

誰も、あたしを信じなかった。  
何も言い返すことも出来なかったけど。

言い返したところで、あたしはやっぱり信じてもらえなかっただろ  
う。

そして、あたしは、その日以降、学校に行くのをやめた。

「あー・・・嫌な夢、見たな」

普通の学校生活を送っていたはずなのに、急転直下していった様を、  
全て網羅した夢だったので。

さすがに寝汗がひどかった。

体がだるくてだるくてしょうがないので、仕方なく体を起こしてみ  
ると、もうお昼を過ぎていた。

頭をポリポリ掻きながら、あたしはぼうつと時計を何秒か見つめて

「あたし、生活がすでにドラキュラっぽいじゃん・・・」

ふと、つぶやいて。

マサキが今日も来る気がした。

あたしは、少し期待しながら、また眠りに付いた。

時計の針はあたしが寝ている間も着実に進み続け、いつの間にかあ  
たりは真っ暗。

部屋の明かりをつけ、軽く背伸びをして、あたしはやっと目が覚め

た。

深夜2時。マサキはまだ来ていない。

もうそろそろ、来てもおかしくない時間だな。

「なんか・・・まだ眠いな」

でも、とりあえず、起きよう。

そう考えて、あたしはパジャマのボタンを外しながら、ダンスから服を取り出した。

「違うなー、どうも俺の好みとセレクトが合わないんだよなあ」

目をこすりながらTシャツを取り出した瞬間、マサキの声が背中から聞こえて、反射的に身体が動いた。

「どちらかと言うと・・・ぶっ！」

あたしの取った動作は、もちろん・・・グーパンチ！

マサキの講釈は、先を聞くことなく終了した。

「このドスケベ！変態！着替え覗くなんて最っ低！」

ささっとパジャマの前を閉じたものの、それほど恥ずかしくなかったのは、マサキの子供っぽい風貌のせいだろうか？

つくづく、得な見た目しやがって。

そう思うと、なぜかむかついてしまったので、おまけにもう一発、頭をぶん殴った。

「ちょ・・・ちょっと待て、オーボーだぞ！暴力反対！」

ドラキュラの真祖であるはずの少年が、あたしに怯えて部屋の隅っこまで後ずさる。

うーん、なかなか、快感だ。

「大体なあ、俺にとってカギなんて意味ないんだから、そりゃそのまま入るに決まってるじゃん」

相変わらず熱い紅茶をがぶ飲みしながら、マサキはふくれる。

「あんたね、バカ？女の子の部屋に勝手に入る男なんて、モテないよっ。」

「フミカがおかしいって。この俺様の美貌に落ちない女なんて、どうかしてる」

「自分で言うなよ・・・」

ガキのくせに。あたしは呆れながら、コーヒーを一口飲んだ。

「じゃあ、あたしもあんたの部屋に勝手に入るよ?」

「え?俺の部屋?」

「うん。それならおあいこじゃん」

「・・・俺の部屋って言うか・・・俺、そもそも部屋なんてないからなあ・・・」

部屋がない?

どういうこと?

「って言うか、家がない」

「家がないの!?!」

「まあ、正確に言えばあると言えばあるってことなのかもしれないけど・・・」

「なにそれ?はつきりしないわね」

「うーん、あれを家と言うのかどうか、俺には自信がないなあ」

どうも、マサキにしては、はつきりしない。

そして、それは、瞬く間に、あたしの興味に切り替わった。

そもそも、あたしはマサキのことを、ほとんど知らない。

ドラキュラの生活ってどんなんだろ?

「じゃあさ、そのあんたの家かどうかよく分からないところに連れてってよ」

「え!?!」

マサキは驚いて、目を丸くする。

いつもはあたしが驚いてばかりだったから、新鮮な感じだ。

「はい、決定。行こ、行こ」

「うーん、まあ、いいけど・・・」

マサキは、また、あたしをドキっとさせる、真面目な表情になった。  
「ただし、ひとつだけ」

この顔が卑怯なんだよ。

あたしは内心そう思ってしまったながら、ちゃんと聞く。

「俺のテリトリーに入ったら、ちゃんと俺の言う事を聞くこと」

「テリトリーって・・・なにそれ？」

「まあ、なんて言うか、俺の家って言うかな、つまり」

どうもマサキにしては珍しく、歯切れが悪いまだ。

「ま、別にフミカならいいか、連れてつても・・・」

そうぶつぶつ言いながら、マサキは立ち上がった。

何よ。

『フミカならいいか』って何よ・・・。

そんな言い方されると、なんか嬉しいじゃないか。

「ホラ、行くの？行かないの？」

顔がどうもにやけてしまうのを抑えていると、マサキが不満そうに言うてくる。

「はいはい、行きますよお」

あたしはバレないように、慌てて立ち上がった。

## ドラキュラが笑ってる・5

「しかしなー……やっぱり……まあ……」  
ぶつぶつぶつぶつ。

昨日はただ驚いてばかりの夜空のフライトだったけど、今日は結構、あたしには余裕がある。

だけど、マサキは、飛んでいる間も、ずっとぶつぶつぶつぶつ。

「フミカ、やっぱりやめとかね？ 行っても面白いことなんか、なんもないぞ？」

「何言ってるのよ、今更」

あたしは抱きかかえられて飛んでもらっている立場でありながら、きつく言う。

「男のクセに、イジイジしないでくれる？」

「うーん……。まあ、俺にそこまで言えるフミカだし、大丈夫か」

何よ何よ何よ？

大丈夫って何よ!？

また不安にさせることを言う。

「まさか、お話のドラキュラの通り、家は棺桶、なんて言わないわよね？」

「おつ、フミカ、分かっているね。じゃあ大丈夫だな」

……冗談のつもりだったのに。

そして、ついた先は、本当に、どこかの教会の墓地だった。

薄暗い原っぱに、墓碑があちこちに並ぶ。

洋画のB級ホラーの、ありがちな光景。

「……で、アンタの家はどこなの？」

もうちょっと、面白みがあってもいいんじゃないの? と思いながら、白けた声で尋ねた。

「・・・あれ」

面白くなさそうに、マサキが指差した先には。  
あれ？

「あれって・・・普通に、家じゃん・・・」

今まで全く気付かなかった。白い外壁の、ちゃんとした家が、目の前にあつたのだ。

「あそこだけ次元を捻じ曲げてるから、普通の人間には見えないし、触る事も出来ないけどね」

・・・いつも簡単に、マサキは言つてのける。

ドラキュラつて、血を吸つたり、空を飛べたり、念力が使えたりするのは、まだ、なんとか理解できたけど・・・。

次元を曲げるって何なんだよ！

「アンタ、やっぱり、すごいんだねえ・・・」

あたしは呆然としてしまった。

でも、当然と言わんばかりに、しれつとした表情のマサキ。

「あ、悪いけど、家の中は入らないでね、片付いてないから」

「えー！何よ、そんなの、あたしんちは勝手に入るくせに」

あたしはそんなマサキの言葉を気にも留めずに、さっさと家の方へ向かう。

「おいおい、ダメだつて言つたじゃん、ここでは俺の言うことを聞くこと」

背中からマサキの声が聞こえても、無視してあたしは前に進んで。

向かおうとしているはずなのに。

・・・あたしは前に進んでるはずなのに。

「・・・なに、これ？」

30秒ぐらい前に歩いて、いつまでも家に近づかない違和感に気づいて、後ろを振り向くと。

マサキは、あたしの真後ろで、イタズラっぽく笑った。

「だから言ってるじゃん、次元を捻じ曲げてるって。フミカ、頭悪すぎ」

「・・・意味がわかんない」

「だーかーらー、簡単に言つと、フミカが前に進んで歩いてるつもりでも、俺の意思ひとつで横にでも後ろにでも歩かせられるってこと」

「なにそれ！？・・・卑怯者」

「すぐ馬鹿にされてるような気がする。」

「だから言ったじゃん、面白いことなんかなんもないぞって。それに・・・」

マサキは言葉をわざと中断すると。

また、真剣な表情を見せて、あたしを見つめる。

何？何なのよ！

「な・・・なに？」

あたしが恥ずかしくなって、先に口走る。

でも、マサキは何も言わない。むしろ、目がさらに鋭くなった気がした。

目の前の少年は、見とれてしまうほどの美少年だけど。

むしろ、今は、なにか・・・怖い。

「今から、ホラーショウの開催だぜ」

マサキの口元が、ひどくゆがんで見えた。

今までの無邪気な笑みとは、明らかに違う笑い方。

「フミカ、後ろ」

マサキがあたしの後方を指差す。

「え？」

あたしが振り向いた時。

全ての思考回路が、凍り付いてしまった。

そこにいたのは、人なんかじゃなくて。

マサキみたいに、人間みたいなドラキュラでもなくて。

本物の、真正正銘の、見た目からすでにドロンドロンの、バケモノだったからー！

叫び声すら、出せない。

ガクガクと、全身が震えてる。

カチカチと、呆然とした口から聞こえる、噛み締められない歯が当たる音。

「ちゃんと俺の言う事聞いとかないと、コイツ等に食われちゃうかもよ?」

マサキの余裕たっぷりな発言も、右から左に耳の穴を通り抜けるだけだ。

だって。

バケモノは、1匹なんかじゃなくて。

数え切れないほどのバケモノが、いつの間にか、あたし達を完全に取り囲んでいたから。

「もう、そんなにビビるなよ・・・ちょっとやりすぎちゃったかな」ニヤニヤと笑うマサキ。

その表情は、いつもの小憎たらしい子供の笑い方。

「この俺様がそばにいるんだから、だーいじょうぶだって」

どこからそんな余裕が出て来るんだよ、マサキは。

あたしは何も言い返す余裕なんかなかった。

「オマエニソノオンナノチハヤレナイ・・・」

魑魅魍魎と言うにふさわしいバケモノ達の大群。

口がどこか良く分からないから、どこからそんな声が聞こえてくるのかも分からない。

・・・その女つて、あたしの血?

相変わらず、あたしの頭はパニック状態だけど、少なくともマサキとこのバケモノ達が友好的な関係には見えなかった。

「うるせえよ、人のデートの邪魔してんじゃねえ」

マサキの笑い方が、いつもと違って見える。

悪魔的な、サディスティックな、笑い方。

はつきりとバケモノ達に向けられている瞳は、弱者をどうやっていたぶろうか考えている強者の目だ。

マサキの手のひらが、ぼんやりと青白く光りだした。

その光が、あたしに向けられると。

あたしの全身を覆って、あたし自身が青白く光った。

「とりあえず、それがあある間は、あいつ等絶対にフミカには手が出せないから」

あたしの方に振り返って、ニヤリと笑うマサキ。

その表情は、やっぱりいつものマサキなのに。

「・・・フミカ、そこから絶対に1歩も動くなよー」

そんなマサキが、あたしに語る言葉だけは、いつものマサキだけど。そこから飛び立って、バケモノの群れに襲い掛かるマサキは、もう、あたしの知っているマサキじゃなかった。

闘いは、まるで正義のヒーロー対悪の軍団のようだった。

マサキの圧倒的な力は、空を自在に飛び回り、手のひらからカミナリのようなビームを連発し、足からはカマイタチのような烈風を巻き起こし。

あたしはへたり込んで、ただ呆然とマサキを見ていた。

月夜をバックにバケモノを嬉しそうに狩るマサキの姿は・・・怖かった。

けど。

怖いけど、なぜか、魅かれていることに、あたしは気付いていた。

## ドラキュラが笑ってる・6

誰も助けられなかった。

あの時、あたしを奇異の目で見ている人たちは、あたしを取り巻くだけで、誰も助けられなかった。

心の中で、たった一人だけ、少しだけ信じている人もいたけれど、  
だけど、その人も、他と同じ。

うすら笑いで、あたしのその状況を見ているだけだった。

誰かに助けて欲しかった。

あたし一人では、どうしようもなかった。

あたしがもう少し気が強かったら、一人でも反発出来ていたかもしれない。

もっと気が強かったら、むしろあの男に平手打ちなんかをくれてやれたかもしれない。

何でもいいから、何か出来たはずなんだ。

でも。

でも。

あたしは、ただ、逃げ出しただけ。

少なくとも、今のマサキみたいに。

立ち向かうことなんて。

絶対に、出来っこない。

そう思えるから、あたしの目は、激しく動き回るマサキを追いかけるのに、必死になりすぎて。

二人きりになったって分かったのは、マサキが優しくあたしに語り掛けてくれたからだ。

「・・・ドラキュラの真祖ってというのは、基本的に処女の血しか吸えないんだよねー」

口調はいつものマサキだけど、表情がやけに真面目で、あたしはまた目を背けた。

・・・なんでコイツはこんなに格好いいのよ。

あれだけ大勢の化け物に囲まれていたのに、今はあたし達以外誰もいない。

全部マサキがやつつけてしまった。

それなのに、なんとまあ、涼しげな声だ。

あたしのドキマギなんかどうでもいいかのように、マサキは続ける。

「・・・で、特に処女の中でも、色々な条件が実はあったりするんだけど、フミカはその条件の中で最高条件を満たしてる」

「最高の、条件・・・？」

「まあ、イロイロあるんだけどさ。俺がフミカの血を吸うと、多分、さらにパワーアップしちゃうんだよねー」

「自分のことなのに、ずいぶん他人事だね」

マサキの表情が和らいでいくのが、声で分かってくる。

「うーん、俺自身はあんまり興味湧かない話だからな」

「・・・？」

やっと、あたしはマサキの方に顔を向けることができた。

「ま、とりあえず、たまには今のままでも敵わないってことを思い知らせてやらねーとな」

ニヤリと笑う、少年の顔をしたドラキュラ。

「というワケで、フミカを連れてくると、多分こうなるんじゃないかって思ってたからさ、まあ・・・その、なんだ、驚かせて悪かったな」

そっか。マサキは、一応、あたしに理由を説明してくれてたんだ。しかも。珍しい、マサキがあたしに謝ってくれるなんて。でも、あたしにとっては、そんなことよりも。

自分が学校で受けたことと、マサキがたった一人で大勢に向かっていく姿を重ね合わせていたのだ。

そっちの方が、あたしにとっては、よっぽど重要になっていた。

「・・・いつから？」

あたしは、ふと、呟くように尋ねた。

「ん？」

「・・・いつから、マサキはあんな化け物と戦ってるの？」

なんでだろう。あたしが真面目な表情になっている。

「ん・・・分かんないけど・・・」

大して興味もないかのように、髪の毛をくしゃくしゃといじるマサキ。

「大まかに言うと、2000年くらいかな？」

そんな、大したことのない、と言わんばかりに。

とんでもない年数を言っただけから、あたしは相当驚いた顔になっていたと思う。

「に・・・にひやく、ねん・・・？」

啞然とする、という言葉が、これほど今のあたしを表現するのに相応しいものはない。

「まあ、そんなもんだけど・・・」

「・・・アンタ、2000年も生きてるの・・・？」

「まーな」

あたしにとっては当然の疑問だったのに。軽く受け流されてしまった。

「2000年も、アンタは一人で、辛くなかったの・・・？」

これもあたしにとっては、当然の疑問だった。だけ。

「・・・まあ、人間の女は、みんなそう言ってきたよ」  
「・・・マサキがこんな悲しそうな表情をするとは、思ってもいなかった。そっちに驚いてしまった。」

悲しそうに、うつむきな瞳。

つくづく、見た目とはこれほど重要だったのかと再認識する。

マサキのような美少年がこんな表情をしたら、女なら誰だって・・・！

って、あたしも女なのに、そう思ってしまっただけ、憂いの表情が美しい。

「そう言っただけ、俺に協力するとか言っただけ、首筋を俺に向けてきてね」  
悲しくなりすぎて笑う、ってというのが、こういう話をするときなのか。

「人間で言えば死ぬっていうことが分かっているのに、俺に血を吸ってこれってお願いしてくるんだよね」

ドラキュラでも、人間と同じように、こういう表情になるんだ・・・。

哀愁の漂う美少年。

なんて言えば、すごくクサイ台詞だけど。

「・・・ま、俺も血吸わないと力が抜けていっただけだから、しょーがないんだけどね」

いつもと笑い方が違うだけで、マサキの思っていることが分かっちゃってしまっただけに陥る。

「マサキはさ、その女の人たち、好きだったの・・・？」  
ぼんやりとした声しか出せないあたし。

「・・・そうだな・・・そうだったのかもな・・・」  
そのまま、マサキはうつむいてしまっただけ、顔が見えなくなる。

あの明るさだけが取り柄のような少年が、そんな弱そうなところを見せるなんて。

でも、好きな人を、自分のために殺すなんて、どんな気持ちになる

だろう？

しかも、それを、好きな人に望まれてしまったら？

・・・マサキの心境は、あたしには理解出来ないものだ。

「マサキ・・・」

あたしは、おそろおそろ、声をかけて、彼の顔を下から覗き込んだ。

「・・・なーんてね」

その顔は、悲哀の涙でも浮かべられているかと思ってたのに。

「って話になれば、フミカも俺に血を吸わせようっていう気になる  
だろ？」

イタズラっぽく、ニヤリとまた笑うマサキ。

・・・この・・・コイツは!!!

あたしはあっさり引っかったのか!!!

「ちよつと・・・アンタね！」

思わず引っぱたいてやろうと右手があがる。

「あはは、それだけ元気があれば、もう家で引きこもってる必要も  
ねーな」

上がった右手を振り下ろそうとして、ピタリと止まってしまった。

「・・・アンタね・・・」

心配してくれていたのか？

やっぱり、この少年のようなドラキュラは、何を考えているのか、  
さっぱり分からない。

「よし、じゃあ、さらにサービスしてやるか」

分からないついでに、さらにマサキは分からないことを言い出すと。  
あたしの上がったままの右手の手首を、軽く掴んで下ろして。

そつとあたしの肩を抱くと。

「ちよ・・・」

何かあたしが言おうとした、はずなんだけど。

何も言えはしなかった。

いきなり、マサキの唇が、あたしの唇に、そっと重ねられてしまった。

そうして。

マサキの唇が、あたしの唇から少しずつ離れて。

あたしは、どんな顔をしているのか、自分では分からなかったけど。

「・・・お？やっつと、俺様に血を吸わせる気になった？」

ニヤリと笑うマサキは、やっぱり、そんな軽口を言ってきたので。

「・・・アンタねえ」

一呼吸おいて。

あたしも、やっぱり、こう言う。

「アンタに吸わせる血なんかはないの！」

ぺし、と頭を軽く叩いてから。

はあ、とため息をついて。猛烈な自覚と共に、ぼそつと呟く。

「・・・だって、もう死にたくなくなっちゃったもん」

くそ。

コイツ。

顔が真っ赤になるっていうのは、マンガの世界の事だと思っていたけれど。

どうやら、本当にこういう時はなってしまうものらしい。

強烈に自覚するほど、あたしの顔は、今真っ赤になってしまっているんだろつ。

どうやら。

あたしは、マサキが好きだ。

あー、もう、認めたくない。  
認めたくないけど、認めないといけない。  
自分に嘘はつけないから。

・・・なんでよりもよって、ドラキュラなんかを好きにならなきゃならないのよ！  
とは思っただけれど。

好きなものは好き。これは、いかんともしがたい事実な訳で。  
でも。

だからって、身を滅ぼしても構わないなんていう、今までのマサキの恋人達？とは訳が違う。

まあ、あんな嘘か本当か分からない話なんて、どうでもいいけど。  
あたしはあたしの人生を、頑張っつて変えていかないと。

で、大好きなマサキに、それを認めてもらうまでは、とても死ねたものではない。

さしあたっては、学校にもずっと行かないわけにはいかない。  
障害があっても、立ち向かうしかないのだ。

あんなどうでもいい事で、あたしの人生が暗いままでは、マサキに好きなどと言えたものではない。

だって、マサキは。  
少なくとも、あたしよりずっと暗い世界で、たった一人で、それでも明るく元気にやってきているのだ。

「・・・ふうん」

マサキは、あたしの心を読むのが得意だ。  
どこまであたしを理解してるだろ？

なんて思っていると。

「・・・!!」

少年のように、イタズラっぽく、まるでそれは人間のよう。

突然、もう一度、あたしにキスしてきた。

「・・・なんだよ、フミカ、隙だらけだぞ」  
ニヤリと笑うマサキ。

そんなことをおっしやられても。

もう、あたしは、不意打ちを2回も食らって、暴発寸前です。

ドラキュラが、笑ってる。

「そんなに隙だらけだと、いつでも血、吸えちゃうなあ。それじゃ面白くないんだけど」

いつものように、ニヤニヤ笑う、少年のようなドラキュラ。

でも、あたしは。

こんなヤツを好きになってしまったのが、どうやら簡単に認めたくないようなので。

すこーん！

とマサキの頭を叩いた。

覗きをされて以来のグーパンチは、我ながら完璧なクリーン・ヒット。

「・・・ちょっと待て、さっきから・・・人の頭をなんだと思ってるんだ!？」

涙目になって頭をさするマサキ。

本当は大して痛くなんかなくせに、なんと大げさな。

だから、いつものように仁王立ちで、はっきりとやってやる。

「アンタは人じゃないでしょ!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6127d/>

---

ドラキュラが笑ってる

2010年10月9日02時29分発行